遠距離介護の試行錯誤　－テレビ電話で母をみる－

（第１回）

家族の会会員　長坂　寿俊

［プロローグ］

父が 60 歳で亡くなってから 25 年、母は悲しみもせずいたって元気、京都の町家で気ままに一人暮らしをしていました。私はこの間、桜村（現つくば）からスウェーデン、札幌を経由して再びつくばに戻ってきましたが、京都に帰るのは盆と正月がやっとです。それでも帰省した時にはいつも、母は大丸まで肉や野菜を買いに行き、すき焼きの準備をして待っていてくれました。言動が気になり始めたのは、2006 年 1 月頃からでしょうか、母は 81 歳になっていました。「隣家との境界が埋められて土地がとられている」、「昔は裏に畑があった、塀に出入り口を作ってその外側のとられた隣地側にも新たに塀を作りたい」、「隣の息子が屋根に上ってホースで水をかけるので台所が 30 センチも水浸しになった」、「銀行の通帳がない、隣の息子に盗まれた」、「隣人が応接間の床下に大きな穴を掘っている」等々をよく言うようになりました。釣り銭らしき小銭が大量にビニール袋にためられていたのもこの頃でした。

2006 年 4 月、一緒に父の墓参りをしたあと、母が寺の社務所の便所を借りている間、一寸目を離したすきに母を見失いました。小一時間も墓地や境内を探し回ったところで、参道入口、門前の駐車場でパトカーに保護されていると寺に連絡がありました。私が先に帰ったと思いこみ、厚かましくも無料のパトカーで家まで送ってもらおうと考えたようです。私にとっては、初めての母の徘徊でした。それでも、日常的には足腰も丈夫で買い物にも行き元気に暮らしていたため、私も忙しさにかこつけてそのままにしていました。年をとって少し頭がぼけてきた程度にしか思っていませんでした。

［介護相談］

事態が動き始めたのは、2006 年 11 月以降です。母が満期の定期預金を解約しに銀行に行った際、窓口での応対で非常に混乱してしまい、その場では解約させてもらえない事があったことが、母のぼけについて認識し、介護について本格的に考えねばならないと思うきっかけになりました。そうは言ってもどうすればよいかわかりません。とりあえず、出張の帰りに京都に寄り、区役所の高齢福祉担当係に出向くことにしました。そこで居住地区を担当する地域包括支援センターを紹介してもらい、O 相談員が対応してくれることになりました。その日の夜、母と色々な話をしましたが、諸事のトラブルに対応するための成年後見人制度については「もし裁判所に行くことになれば怖い、死んでしまう」、老齢介護の相談員が明日来宅することに関しては「呼ぶ必要はない、病院に行くことになったら 2 階から飛び降りて死んでしまう」と言って大変興奮してしまいました。

翌日の朝、起きてみると、母は外出用の着物を着ています。私は相談員が来るから母が身支度をしてい

るのだと思っていました。ところが暫くして、玄関前に突然タクシーが来ると、母がバッグ、手提げ金庫、傘を持って家を出ようとするではありませんか。あわてて母をつかまえ、タクシーを断りました。しかし、ほっとしたのも束の間、ふと気づくと、また母が玄関を出て、今度は少し離れた路上に停車していた先ほどのタクシーに正に乗り込もうとしています。驚いて連れ戻し、今度こそ出ないように見張っていました。「用事があって出かけるからタクシーを呼んだ」そうです。

そうこうするうちに地域包括支援センターのO相談員がバイクで来てくれました。早速、母と面談しながら、介護保険要介護認定申請書の作成、チェックシートの記入に取り掛かります。このような時、母は面談ではわざと元気だというところを見せつけます。「毎日、大丸に買い物に行っている」という話のため、タクシー会社に電話で確認すると、最近では実に2日に1回の割でタクシーを呼んでいたことが分かりました。相談員の見解では「最近のことをほとんど忘れている、認知症が進んでいるのでしょう」。とりあえず要介護認定審査の結果を待つことになりました。

この頃、同じく京都在住の叔母から「親類の葬式でお姉さん（母）の様子がおかしかった、その場にいないはずの人を探していた、バッグの中のお札を何回も数えていた」という電話がありました。

［警察への苦情電話］

2006年12月、警察署から突然の電話がありました「お母さんが最近、昼も夜も何回も苦情の電話をしてくるので、婦人警官を派遣して隣家立ち会いで家の外側を調べたが壁等に異常はありません。警察から市の介護担当に事情を連絡しておきます」。母に言い分を聞いてみると「隣人が壁の板を壊して我が家に入り、二人で床の間に荷物を運んでいる。テレビの下に大きな機械の箱を入れて、その箱に火をつけるとカーンと大きな音がする。火事になったら怖いし、床下を掘って入ってくるので警察に電話した」。翌日、京都に駆けつけ、夫婦で警察署と隣家にお詫びに行きました。妻と二人で急に帰ってきてバタバタしているのを見て何か不安に感じたのでしょうか「病院に入院させるなら出ていく、遠くに行ってしまう」、「お前が認知症と近所に言いふらしているから区役所の人が来たりする、そんなことをすると罰があたる」と言いました。

［要介護1に認定、専門医師の診断］

相談員から「要介護1に認定された、先ず認知相談を受けた方がよい」と助言をもらいました。手始めに近所の日赤病院の相談室に行き、老年介護専門のS診療所を紹介してもらいました。「認知症としては軽度だが被害意識が強い、本人に病気の認識は薄い、つじつまの合わぬことを言っても否定するのではなく言うことを聞いてあげるのが大事、今の状態ではグループホーム等施設に入れるのは逆効果になると思います」というM医師の診断でした。2007年3月、高血圧症治療のために毎月通っているH病院でMRI検査を受けさせました。結果は「軽い脳梗塞の痕跡はあるが特に異常はありません」、アリセプト（アルツハイマー型認知症進行抑制剤）を処方してもらいました。このMRI写真を借りて別の老年精神科のT医院を訪ねると「アルツハイマー型認知症中期の初めですね、良くはなりません、薬で進行を遅らせるだけです」。いずれの医師も時間をかけて丁寧にやさしく診断してくれました。

つづく